

令和 2 年 5 月 13 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17H04469

研究課題名（和文）トラウマを抱えた子ども・若者の養育者を対象とした包括的移行支援プログラムの開発

研究課題名（英文）The development of a comprehensive migration support programs for caregivers of children and young people who suffer from trauma

研究代表者

花田 裕子（HANADA, Hiroko）

長崎大学・医歯薬学総合研究科（保健学科）・教授

研究者番号：80274744

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって開発された研究プログラムは、米国オクラホマ大学の米国内で提供されている子どものトラウマの研修内容をベースとした。しかし、研究者らの調査によって明らかにされた、日本のトラウマを抱えた子ども達の問題行動に焦点を当てた内容に修正してパイロットスタディを実施した。参加者と研修内容について検討してコンテンツ及び説明方法、日本語の表現の分かりやすさを改善していった。その結果、本研修プログラムは、参加者たちから、子どものトラウマの理解とその影響によって生じる様々な問題行動についての理解を深めることができる。参加者が具体的な支援方法について2つの理論を理解でき応用できるようになったと評価された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、トラウマを抱えた子どもを養育する里親や児童養護施設及び児童精神科病棟の看護師を対象としたケアテイカーのための研修プログラムの開発を目的とした。日本においても、徐々に児童虐待をはじめとして子どものトラウマは、子どもの成長発達に大きな影響を及ぼすことが知られてきた。里親たちは、子どもと生活を共にする過程で様々な問題を感じているが、なぜそのような問題を起こすのかどう関わりとよいか分からない状態であった。本研修プログラムを受講することで、子どもの問題行動の理由がトラウマに由来すること、どうかかわるとよいか、そして回復への時間が必要なことを理解できたと評価された。広く活用されるようにしたい。

研究成果の概要（英文）：The research program developed by this study was based on the training content of trauma for children offered in the United States at the University of Oklahoma in the United States. However, the pilot study was conducted with a revision to the content of the behavioral problems of Japanese trauma children revealed by the researchers' research. We examined the contents of the training with the participants and improved the content, explanation method, and Japanese expression intelligibility. As a result, this training program will deepen the participants' understanding of the child's trauma and the various problem behaviors that result from it. It was evaluated that the participants were able to understand and apply the two theories about concrete support methods.

研究分野：児童精神看護学

キーワード：移行支援 子どもトラウマ 里親 看護師 児童虐待

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

24年度から4年間の科研費(基盤研究B)「16歳以上の虐待被害者を対象とした包括的継続的自立支援に関する研究」で、子ども・若者の抱えている自立に向けての課題や支援のためのニーズ調査を全国の里親・ファミリーホーム・児童養護施設・自立援助ホーム・情緒障害児短期治療施設を対象とした調査を実施した。その結果、子ども・若者の自立への課題と養育者が抱える対象理解不足からくる不安が明らかになった。子ども・若者の自立の課題として養育者達が共通して認識していたことは、「基本的な生活習慣の未修得・マナーやルールを学んでいない・問題解決の方法を知らない・対人関係の不器用さ」などであった。これらの問題は子どもの貧困問題に直結していた。また養育者たちの「なぜこのような問題行動や発達上の問題を持っているのかを知りたい」というニーズも非常に高かった。

2. 研究の目的

24年度の自立支援ニーズ全国調査で、里親委託でも施設委託でも共通する子ども・若者の移行支援の課題が明らかになった。この調査では、児童虐待被害者だけでなく、親の依存症や精神疾患による不適切な養育環境や家庭内暴力の目撃などでトラウマを負った子ども・若者が多く存在していた。現在の脳科学では、生活スキルや対人関係のスキルは「信頼できる人から教えてもらうことで初めて身につくもの」であることが立証されている。本研究は、養育者をエンパワーメントしながら、子ども・若者の移行支援を支える養育者対象の包括的移行支援プログラムの開発する。

3. 研究の方法

過去3年間参加した米国の移行支援学会を主宰していたオクラホマ大学の青少年向けサービス国立研究所のトラウマの専門家である講師の招聘をオクラホマ大学に依頼して快諾を得て契約を締結した。子どものトラウマ研修プログラムの内容について、オクラホマ大学の講師と検討を行い、研修プログラムを決定した。その後平成29年5月、9月に首都圏、地方都市、島しょ部など5か所でパイロットスタディを実施した。里親や児童養護施設の職員と研修内容や説明のわかりにくさなどを検討してもらい、研究者間で日本語がわかりやすいように繰り返し修正を重ねた。

(1) 研修スケジュール

トラウマ研修2日間(10時間)通訳付き 2日間あるいは1日間(5-6時間)

フォローアップ研修1日間(5時間)通訳付き、通訳なし共通

* 終了後半年後に開催 その間はSKYPEで個別相談を受ける計画であったが、里親たちは多忙であり、パイロットスタディの時にコンタクトはあるものの実際に相談に至ることはなく、現実的ではないためその後の研修ではプログラムに入れず、フォローアップ研修では、半年間の実践と研修内容の復習と実践的な相談や疑問への対応となりアドバンスコースとなった。

(2) 参加者

パイロットスタディ

長崎 上五島 - 那覇 青森 東京 参加者45名(里親・養護施設職員)

日本語版プログラム

岐阜 石垣 横浜 東京 参加者40名(里親・児童相談所職員・看護師)

(3) 研修内容

子どものトラウマとは何か 何がトラウマとなりえるか ACE(逆境の児童期)研究について 脳の発達と乳幼児期の経験 通常ストレスとトラウマ的ストレス ストレスが脳に及ぼす影響それが他社にどのように見えるのか 感情の活性化のレベルと脳の状態 意図的な関係性の取り組み 回復のための援助的アプローチ(かかわり方モデル・発達論的アプローチ)

4. 研究成果

(1) 実践的取り組み

3年間継続していた熊本震災支援(上益城郡御船町)のコンプレックストラウマの症状が不安定な学童が、さらなるトラウマ体験(慕っていた叔母の死)をしたときに緊急的に熊本を2回訪問した。プログラムの内容を母親に指導して、母のかかわりも課題は残るものの変化していった。児にたいしても興奮緊張状態で行動化が悪化した危機状態の時はプログラムの内容を参考に実践を行って活性化を徐々に沈静化していけるよう関わり穏やかな状態に変化していった。

(2) 研修時の質問紙の統計結果

尺度	研修前(n=43)		研修後(n=43)		Follow-up後(n=37)	
	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)
GSES	48.3	(8.5)	51.3	(8.2)	47.1	(9.4)
			***			***
SRS-18	46.6	(8.6)	42.7	(6.5)	47.4	(9.3)
			***			*
Depression-Anxiety	45.9	(8.4)	42.7	(5.7)	46.7	(8.6)
			***			*
Irritability-Anger	45.5	(5.9)	42.6	(5.7)	45.7	(8.1)
			***			*
Helplessness	50.2	(8.6)	47.3	(7.5)	51.7	(9.6)
			**			*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001, Wilcoxonの符号付順位検定

GSES; General Self-Efficacy Scale, 標準化得点を使用, 得点が高いほど自己効力感が高い

SRS-18; Stress Response Scale-18, 標準化得点を使用, 得点が高いほどストレスが高い

セルフエフィカシー尺度の得点は有意に上がっていて、ストレス尺度の得点が研修後は有意に下がっていた。半年後のフォローアップ時には両方とも研修前に戻っていた。

表 日本版研修参加者（38名）の研修前後およびFollow-up後のGSES、SRS-18の変化

尺度	研修前(n=38)		研修後(n=38)		Follow-up後(n=21)	
	mean	(SD)	mean	(SD)	mean	(SD)
GSES	45.5	(9.9)	46.9	(10.7)	47.1	(11.7)
			*			
SRS-18	48.0	(8.9)	46.2	(10.0)	45.7	(7.1)
			*			
Depression-Anxiety	47.2	(8.9)	45.9	(9.5)	45.6	(7.8)
			*			
Irritability-Anger	46.5	(6.6)	45.6	(7.5)	45.3	(6.0)
			*			
Helplessness	51.6	(8.8)	49.9	(10.5)	49.2	(7.5)
			*			

*p<.05, **p<.01, ***p<.001, Wilcoxonの符号付順位検定

GSES; General Self-Efficacy Scale, 標準化得点を使用, 得点が高いほど自己効力感が高い

SRS-18; Stress Response Scale-18, 標準化得点を使用, 得点が高いほどストレスが高い

セルフエフィカシー尺度は有意に改善しているが、ストレス尺度では総得点では低下しているが統計的な優位さは認めなかった。半年後のフォローアップ研修時では、研修後と同じくらいの値であった。ただし継続参加者が22名で(38名中)ある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Hanada H, Nagae M
2. 発表標題 Consideration of a support program targeting caregivers of children with complication trauma.
3. 学会等名 23rd World congress of the international association for child and adolescent psychiatry and allied professions. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nagae M, Hanada H
2. 発表標題 ・ Comparison of general self-efficacy and psychological stress between foster parents and staff members of residential children's care institutions.
3. 学会等名 23rd World congress of the international association for child and adolescent psychiatry and allied professions. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 代表花田裕子 他当事者4名
2. 発表標題 シンポジウム 当事者から学ぶ児童精神看護
3. 学会等名 日本精神保健看護学会 第28回学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	永江 誠治 (NAGAE Masaharu) (50452842)	長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・准教授 (17301)	